寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

木屋瀬の一番ア・ツ・イ夏!!

古より　木屋瀬住民が依り代神として崇めてきた須賀神社の祇園祭が、本年度は七月の十日・十一日に執り行われます。

栄えある山笠当番町は〔一番青山笠〕を新町町内会〔二番赤山笠〕は東中町町内会が務めます。

さて、毎回、木屋瀬祇園に〔より多くの地域の皆様に・より親しんで戴こう〕との思いで、祇園行事に関する事など、私の拙い識に私見を交えてお伝えさせて戴いて居りますが、今回は昭和三十八年以降〔実行委員会形式〕と〔山笠当番町輪番制〕で執行されている祇園行事の仕組み為り立ちについてご説明申し上げます。

先ず〔実行委員会〕の組織形態ですが、木屋瀬地区の自治区会長が兼務する須賀神社・氏子総代会長が実行委員長、木屋瀬商工連盟会長が兼務する氏子総代副会長が副実行委員長、会計は氏子総代会会計が務めると云う役員体制が、当初から永い間の慣例でございましたが、近年では、副実行委員長に自治区会副会長二名を加える新役員構成を執り、実行委員には各町内選出の氏子総代と宮司選任の氏子総代（宮係）及び商栄会・青年会・山笠会館運営委員会の諸団体の参画に依って構成されて居ります。

実行委員会の役割はと申しますと　祇園祭（神事行事・奉納行事）全般の運営と運営資金の調達でございます。

運営資金については、氏子（町内会入会者・現在約七百五十所帯）の負担金〔昭和三十八年以来一戸当り五百円〕と内外からの寄付金に依るものです。が、昨今の政経の混迷と不況の時世に於いては、寄付金の額も年々減少を辿り、緊縮財政に努めるほか余議の無い状況下にございます。

次に木屋瀬祇園の伝統である〔山笠当番町輪番制〕ですが、現在は、本町六町赤山笠は六年に一回、新町七町青山笠は七年に一回輪番で巡って来ます。

山笠当番町となった町内は、山笠の運行責任及び山笠関係者（双方とも約百五十名以上）の二日間に亘る昼食・夕食ほか休憩時の飲食賄い接待と受け持ちます。

其の費用につきましては、実行委員会本部からの給付金と〔赤山笠本町六町〕・〔青山笠新町七町〕夫々独自の制度に依る各町内からの負担金、及び寄付金の他は山笠当番町が負担します。

百所帯以上の町内から三十所帯にも満たない町内まで様々ですが、各町内とも自町内の誇りと威信をかけ、総取締役を中心に一丸となって栄えある山笠当番町を務めるのが木屋瀬祇園の習いでございます。

以上、簡単に現在の祇園行事の仕組み為り立ちについてお伝えしましたが、ご理解戴けますように、筑前木屋瀬祇園祭は、須賀神社氏子の浄財と協力の結集に依って伝承されているのでございます。

つきましては、今後の在り方や山笠への氏子外参加者の処遇など含む諸問題など課題も累積して居りますが、此の木屋瀬の地に祇園社が創建以来、何時の世にも氏子の尊神を遍く集め、永々と継承されて来た伝統行事であると共に、未来を担い行く若き世代の郷土愛を育む木屋瀬住民が共有する「歴史的文化財産」と云う観点から、今後も木屋瀬祇園の健全なる〔保存・育成〕に、温故知新の精神と熱き思いで取組んで参る所存でございますので、ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

第44回・筑前木屋瀬祇園祭実行委員会
副実行委員長　柴田泰助

風景街道 IN 木屋瀬宿

6月6日(日)、北九州風景街道まつりin木屋瀬宿が、北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館において開催されました。

「木屋瀬宿まちなみあるき」としてスタンプラリーやガイドツアーが催され、多くの方が木屋瀬の町並みを楽しんでおられました。また、こやのせ座においては、木屋瀬宿場踊りや、鹿児島大学教授・原口泉氏による講演会、北九州風景街道(長崎街道)推進協議会総会が行なわれました。

スタンプラリーを楽しむ参加者

扇天満宮にて記念撮影

木屋瀬宿　町茶屋守甚三郎乍恐申上ル口上之覚　その四

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

長崎奉行供侍、町茶屋薩摩屋亭主に五百文取替を強要!

町茶屋については、ご存知のように江戸時代に於ける諸大名や長崎奉行が、参勤交代の際に休泊する藩直営（藩主の別邸）の宿舎である御茶屋に対して、半官半民経営の旅籠である町茶屋を指すのである。

茶屋守とは、宿場の代官から「預かり町茶屋」とも呼ばれるように、民間人が自分の屋敷を藩に提供して、その主人が「茶屋守」に任命された。御茶屋の補助的な休泊施設であって、建物の維持修理は藩の費用が充てられた。町茶屋守甚三郎は、石橋甚三郎と名乗り藩から石橋家代々にわたって、町茶屋「薩摩屋」を経営していたのである。

現在地の市立長崎街道木屋瀬記念館の一帯が、江戸時代には黒田藩主の別邸でもある御茶屋（本陣）に隣接して二軒の町茶屋があった。先に述べた薩摩屋と別に「長崎屋」という屋号の町茶屋で、中村彌平次と名乗る町茶屋守が石橋甚三郎と交互に、御茶屋に大名等が休泊した時の茶屋守を勤めていた。

さて、口上之覚（口答で述べる事を後々の為書き記す）の仔細については、安政二年（百五十五年前）の八月某日、長崎奉行一行が長崎に下向中に昼休を木屋瀬宿で行った際の出来事であった。供侍の雑用に従事する奉公人の小人（職名）が、茶屋守甚三郎に向って言った事は、昼所（昼食代込みの接待）の金子は如何程かと尋ねたので、「はい、定めで五十疋（五百文）程、頂戴しています。」と答えた処。毎年、当宿木屋瀬で昼休しているゆえ、内緒で幾分か廉くして欲しいと、申されました。早速、宿場役人の所へ参り、以上の申出を伝えると、「委細御含之御趣意ヲ以相断候」、つまり昼所の代金を廉くすることが出来ない定めである事情を話して、お断り申すように言われたので、はっきり断わった次第である。

すると、ご当人は執拗に「是非世話致居不申而難渋ニ差及可申段……」と、申されて何とか昼所の料金を廉価にするように頼む、非常に困っている等々を言われ、溜め息をつかれる程の落胆の有様であった。

仕方なく再度、宿役人に相談した処の結果、「左様ニ申募候者飯塚御泊所ニ而自然仕向等ニ相成候ハ当宿之所茂少々仕向可申旨……」と伝えて丁重に、昼所の代金を廉くする事は出来ない旨、固く断り、今夜の泊所飯塚宿に於いて多少の便宜を図る様に申し添えますと、宿役人の回答を伝えた。

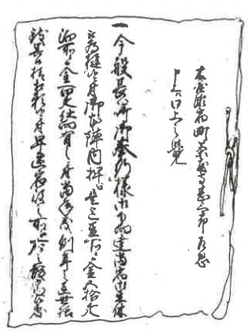
ところ突然、私儀（甚三郎）に金子の借用を強要された次第である。それなる言葉は、「金五十疋（五百文）取替（金銭の用立）呉候様相頼登之節（参府の時）此方依払可申ニ付ニ夫迄取替（用立）候様」であった。

以上の経緯から推測すると、借金を強要された薩摩屋甚三郎は、ご家来に金子五百文の用立を結果的には説得されたようだ。

植木・上境村大庄屋や郡役所の水野貞之進奉行に差出した口上之覚の文面の後半に、「金子取替候様強而相頼候ニ付無拠私依内分ニ而取替候間宿役之所江者是迄引合茂不仕義ニ御座候登之節請取約定仕取替申候」と、書き述べていることは、五百文の用立を無理矢理に頼まれたので、仕方なく私の方より内緒にて行った次第です。宿役人の方には相談も致しておりません。次なる参府でお供して木屋瀬宿に着いた時に、用立した金子を返済するとの内容の証文を取り交わしましたとの事。

長崎奉行や諸大名の参勤交代のような公式の行列は、格式や権威が重視されて、行列の人数・供揃い・服装等にも規定があった。普段は供侍の雑用や走り使いをしていた小者である小人でも、武家奉公人であって、行列の一員なので足軽より身分が低い下級武士だが、権威をふりかざして難題や金品や飲食を強要していたようだ。身分制度が厳しいので、こうした受け身の立場の町人達は、従わざるを得なかったようだったと思う。

断わりきれず宿役人に内緒で、相手の強要に応じて約定の証文を交わした薩摩屋甚三郎に、用立した五十疋なる金子が、次なる参府り折に無事に返却されたかどうか。



新職員紹介

東　龍志（ひがし　りゅうじ）

副館長としてまいりました。「来て見て楽しい木屋瀬」を皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思います。よろしくお願いします。

大重　優花（おおしげ　ゆうか）

企画展などを通じて、木屋瀬の魅力を多くの方に知っていただくように、努力致したいと思います。

新卒の上、大学では考古学を専門に学んでいたため、至らない点が多々あるかとは思いますが、皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

■第2回 高野家展を開催決定!

第39回企画展は第2回高野家展です。開催期間は7月17日(土)～8月29日(日)を予定しております。明治時代の表具店であった高野家に伝わる屏風や掛軸、書籍、家具道具、陶磁器などを展示致します。

なお、6月6日(日)まで開催しておりました「～西川幸夫　スケッチ・淡彩『四季彩』木屋瀬教室～こやのせを描く」展の来場者は771名でした。皆様のご来館、誠にありがとうございました。

シリーズ　筑前木屋瀬宿

第十九回　須賀神社 神仏めぐり ～その三～

「私の曽祖父は遠賀川木屋瀬の川船頭、小添伝兵衛の三男で正太と称し佐賀の藤家に婿養子に入り、故あって台湾に渡り菓子業を起こし大成功を納めた人物です。」これは作家北方健三が自分のルーツを探る小説として、日本経済新聞に一昨年連載された、「望郷の道」の一説です。

木屋瀬の船頭出身で大実業家の出世話であります。これがフィクションなのか、実話なのか、早速、明治二十二年に木屋瀬の船頭衆百余名の方々が寄贈した参籠殿の奉納額にしや名前があるのではなかろうかと、出かけて調べてみましたが残念ながら見あたりませんでした。その後の調査で、この人物は実在の人物ですが、佐賀の富士町出身で台湾に渡り、ドロップスと言う銘菓を開発し菓子業で大成功を収め、大正、昭和初期、グリコ・森永と並び称される日本の三大菓子メーカーとなった新高製菓の創業者森兵太郎さんの話でした。

さて、参籠殿の入口に掲げられた木彫りの見事な筆跡の社額は、現在の須賀神社宮司の曽祖父である末松公庭宮司の筆によるものです。

末松家は代々野面の八所神社と須賀神社の宮司を司っておられますが、末松家の家系は大変古く現在の末松公博宮司で第五十一代目です。今から一二〇〇年前、嵯峨天皇の時代に出された、社職（辞令）が現在も末松家に保管され、それが代々引き継がれ今日にいたっているのです。また、五十一代に渉る家系図もありその歴史の重さに驚くばかりです。須賀神社は、社歴によると永享年間（一四二九～一四四一）に歓請され、その後荒れはてたるを、寛永二年（一六二五）木屋瀬の豪商伊藤宗伯が神廟を建て祭祀をなしたものであると伝えられていますが、それ以前から木屋瀬の人達はこの地を神聖なる場所として敬っていたものと思われます。

江戸時代までは祇園社と称していましたが、明治元年、維新政府の神仏分離令により、須賀神社と改名しました。現在の神殿拝殿は大正十四年に新築され、平成十六年に大修復された建物です。

須賀神社の祭神は、素盞嗚尊（すさのおのみこと）、奇稲田媛命（くしなだひめのみこと）、大己貴神（おおなむちのかみこと）、軻遇突智神（かぐつちのかみ）の四神です。五穀豊穣、厄除け、縁結び、学問、防災の神様です。

木屋瀬の歴史は古く六世紀、物部の守屋が蘇我氏に敗れ、その後の物部辰狐が配流されたのが木屋瀬であると、木屋瀬町史は伝えています。又、町並みの形成は、木屋瀬宿一番の古刹である長徳寺が、鎮西上人の度々の寄寓の縁で、西暦一二三五年、浄土宗として開基すると縁起に記されていますので、今から約八百年位前から、木屋瀬は遠賀川の物流基地として、又、寺社仏閣の門前町として多くの人達がこの地に住んでいたことが推測されます。その住民達が今日に至るまで、安産祈願から、初宮、七五三、お正月の初詣、厄除け、結婚と日々の暮らしの中で、有りとあらゆる願いや思いを氏神であり、又、産土神社である須賀神社に詣で参拝したことでしょう。

この境内は、

このような過去から現在にいたるまで木屋瀬の多くの人達のいろいろな深い思いが交錯した場所でもあると思うと感慨深いものがあります。

須賀神社 宮司
末松公博氏

狛犬の背に跨りし春の夢
星まつり達き闇より寄せ太鼓

本町　野口靖彦

扇天満宮　学神祭
道真公のもとで学業向上を祈願！

扇天満宮は約六六〇年前の観応年間（一三五〇年～一三五二年）以前から鎮座されていて、ご祭神として菅原道真公が祀られています。道真公は優れた学者であったことから「学問の神様」として永く人々の信仰を集めています。

学神祭は天満宮の神使である牛と道真公が梅を愛したことから、毎年新一年生の男子が「うし」、女子が「うめ」の習字を奉納し、学業上達を祈願するものである。

本年は前夜からの雨天のため、小学校の運動会が延期となる悪天候の中、5月23日（日）午後四時から扇天満宮において、学神祭の神事が執り行われました。男子8名・女子12名計20名の新一年生は保護者の見守る中、揃いの法被をはおり、神殿に直座し、玉串奉典には一同、神妙に拍手を打ち学業向上を願いました。式典終了後、雨天のため記念植樹は行えず、子供たちは記念品を手に記念写真を撮って学神祭の行事が終了しました。同じ日の午後七時より扇天満宮の例祭の神事が執り行われ、関係各位の御参列により、厳かに進められました。

悪天候の中、関係者の皆様のご協力により扇天満宮学神祭を無事に終了することが出来ました。心より御礼申し上げます。

下町町内会長　石橋　修

新一年生20名で記念撮影

わたしの昔話

筑前六宿街道と木屋瀬

筑前六宿街道は、九州の東海道とも呼ばれ、西九州や南九州の十五大名や長崎奉行やオランダ商館長が参府等に利用していたので、九州一のラッシュ街道となった。こうした中で追分宿の木屋瀬は大賑わいを呈し九州表街道唯一の宿場として繁栄した。

薩摩の島津公は、文政八年より筑前六宿街道があまり混雑するので、福岡藩や唐津藩が通る筑前六宿街道（福岡、箱崎、青柳、畔町、赤間、木屋瀬）を利用している。

一般の旅人の中でも筑前六宿街道の混雑の中には、道中師やチンピラも居そうだし、宿泊も合い宿を乞われる事もありそうだし、盗難やその他の煩わしき事も考えられ六宿街道を避け、秋月街道へ向かった人もいた。

それでも追分宿の木屋瀬は、赤間は西へ、飯塚は南、北は黒崎、小倉の城下と、手甲脚絆に振り分け行李、編み込み草蛙に杖軽く、旅から旅の人々で終日活気に満ち満ちていた。

追い分けに
来て趣いけり　花蜜

木屋瀬本陣のお客は、長崎奉行と、殿様と御一族が主であった。一年に一度江戸に参府する、オランダ商館長もいた。長崎奉行の一回の食事は、三の膳以上もつけて（費用九百五十文）五千円位かな、豪勢な事、お殿様は

それ程でもなくおよそ規定があった。

下に下にと威勢良く、お着きの殿様、お発ちの殿様の行列を、送迎する木屋瀬の人々は馴れてはいても、諸事万端、神経を使う事も多かった。お発ちの駕籠をお見送りする本陣前の人達に（ビードロ）硝子の指輪を下さった島津侯のお姫様、ラッカン菓子を配られた鍋島侯の奥方さま、今も尚、宿場時代の話の中に、美しい香りを漂わせている。

象さまのお通り

長崎のオランダ商館長が、江戸の将軍さまに贈ったものでで。享保十四年三月十四日人足十三人付き添って長崎を出発、五月二十五日に江戸に着いている。長崎街道、中国街道、東海道とよくも歩き続けたことである。

宿場には象さまの食料用意の前触れがあった。一日分、米八升、ダイダイ五十個、九年母五十個、あんなしまんじゅう五十個、ひめ草五十斤、いたやかず五十斤である。長い鼻をブラブラ振って、大勢の人足を従えてノッシノッシと歩く、象さまのお通り。宿場に集まった大勢の見物の人達は、初めて見てただ驚きの目を見張った事であろう。

七代将軍家継も大変驚いている。

後に虎や孔雀、駝鳥等も贈られている。

柴田豊廣遺稿集より

〔第九回　木屋瀬芸術祭報告〕

五月連休の四日間に亘る開催期間中では、今年も延べ千人を超える参加・集客で木屋瀬宿記念館は多いに賑わいました事をご報告申しますと共にご協力に感謝致します。

内容的には、娯楽性を求めた新企画〔こやのせ座おもしろライブ〕では芸事好きな老若男女で〔こやのせ座〕は終日賑わい、次回への発展を多いに予感させる展開となりました。

又、他に類いなき四本立ての基幹企画 ①〔筑前木屋瀬八幡伝説伊藤小左衛門〕②〔長崎街道筑前六宿フォーラム〕③記念シンポジウム〔鉄の都は甦るか〕④〔筑前郷土芸能連絡会議〕は　回を経る毎に格調と発展性の高まりを実感致します。

特に〔長崎街道筑前六宿フォーラム〕では、今回、佐賀・長崎からの参画を迎え、長崎街道二十五次全線住民間の協力連携する活動の第一歩を現実に踏み出しました。

当にオンリーワンの「町づくり」を目指す木屋瀬住民（川筋者）の気宇壮大な文化的気風を内外に示すイベントへと成長して参りました事を心嬉しく存じます。

本年度で木屋瀬宿記念館の開館十周年と云う節目を迎えるにつき〔こやのせ座運営部会〕では〔本物志向の継続〕と〔自主企画・自主運営〕の基本理念を踏まえ、新たなる思いで今後も活動を展開して行く所存でございますので、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

最後に〔こやのせ座運営部会〕では、年間を通じ、私どものボランティア活動にご参画戴く方を募集して居りますので、ご興味をお持ちの方は随時ご連絡下さい。年齢性別は問いません。

連絡先：090・9560・5585〔こやのせ座運営部会〕

部会長　柴田　泰助